

会計データ標準化で変わる 税理士業務の未来像

会計事務所が当たり前のように使っている会計ソフト。最近では会計分野にも「Fin tech」の動きが目立ち、新たなサービスが次々に台頭している。そうしたデジタル化の技術革新で要となるのが、データの標準化のための「XBRL」と呼ばれる技術。一言でいえば、コンピュータやソフトウェアの種類が異なっても、相互にデータの交換・加工ができる世界標準のフォーマット。いわば裏方で頑張る技術が、会計事務所にどんな影響を与えるであろうか。そこで、この分野に精通する井原英貴税理士に、テクノロジーの変化がもたらす税理士の未来像について、分かりやすく解説してもらった。



税理士 井原 英貴

IT環境の変化を加速させる『XBRL』技術に期待

1. 究極のフィンテック会計

「月曜の朝、あなたが会計事務所に出勤して、コンピュータの電源を入ると、顧問先の帳簿ができあがっています。弊社の優秀な会計ソフトが、顧問先の預金や電子レシートのデータを自動的にダウンロードして、自動的に仕訳を起し、試算表に組み上げてくれます。週末も、深夜も、ソフトは休みなく働きます」

まるで「靴屋のこびと」のような話ですが、おとぎ話でもSFでもありません。これは韓国の大手会計ソフトメーカーDUZONの、SuperBookという製品の広告です。

昨今話題のフィンテックとは、金融技術とIT技術の融合によって生まれる、新しいサービスをいいます。ビットコインのような決済技術に限らず、たとえば銀行の預金データをインターネット経由でダウンロードして、会計ソフトに流し込むといったサービスもまた、フィンテックと呼ばれています。この、DUZONのSuperBookは、その究極形のようなサービスです。

2. 鍵となるのは、データの標準化と機械可読性

日本では、上記のようなサービスは、まだまだ普及の途上にあります。普及の障害となっている要因のひとつが、データ形式が標準化されていないことです。領収書などのエビデンスは、ほとんど電子化されていませんし、電子化されていても、データの形式は、各社まちまちの状態です。さらに、エビデンスの流し込み先になる、会計ソフトにおいても、メーカーごとにデータ形式は各社各様です。

もう一つの問題が、データが必ずしも機械可読 (machine readable) になっていないことです。機械可読とは、人間が目で見れば判断しなくても、コンピュータがデータの意味を正確に判断して、必要な部分を抽出できることです。機械が、データの意味を正しく識別できるのであれば、たとえば科目の判断材料や、見越し繰り延べの計算に必要な日付情報などを、人の手を介さず的確に見つけ出し、処理することができます。

昨今話題の人工知能 (AI) や、ビッグデータ解析も、このようなデータ形式を必要としています。データが標準化されていること、機械可読な形式になっていることが、フィンテック会計とAI・ビッグデータ解析の大前提です。

3. ソリューションとしてのXBRL

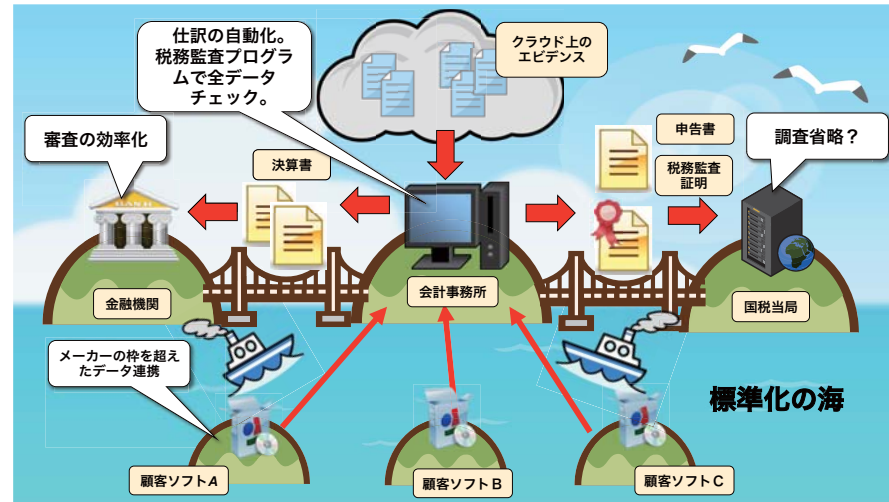
実はわれわれはすでに、国際的に標準化された、機械可読なデータ形式をもっています。XBRLというデータ形式

が、それです。

聞き慣れない名称ですが、XBRLは、我々税理士が、毎月のように使っているデータ形式です。e-Taxの法人税申告書データに添付される、決算報告書のデータ形式が、XBRLなのです。国税庁のサーバーは、どのメーカーのソフトで作られた決算報告書でも、一様に受理します。これは、e-Taxの決算報告書データが、XBRLという標準形式で送信されているからです。

XBRLは、決算報告書だけでなく、その内訳明細に該当するデータを記述することもできます。振替伝票、仕訳帳、総勘定元帳、試算表といった会計帳簿の他、領収書、請求書といったエビデンスも表現できます。XBRLは、およそどのようなビジネス文書でも記述できるように作られた、汎用的なコンピュータ言語なのです。

データ標準化「XBRL」で実現する業務変化



4. XBRL GLのメリット

データが標準化され、機械可読になれば、われわれ税理士には、どんなメリットがあるのでしょうか。

- ①エビデンスデータを仕訳に変換するなど、自動仕訳の実現が容易に。
- ②顧問先入力ソフトと会計事務所用ソフト間で、データの互換性が確保される。
- ③開発サイドにおいて「餅は餅屋」の棲み分けが可能に。
- ④ベンダーの乗り換えが容易に。(ベンダーロックインの解消。それによる健全な競争)
- ⑤新規顧問先に対して、前任税理士から、過去の経理データを引き継ぎやすくなる。
- ⑥電子帳簿保存法の適用を受けている企業では、調査官が臨場する必要がなくなる。税務署は署内で机上調査ができ、調査の効率化が図れる。「税務監査プログラム」を走らせれば、取引を瞬時かつ網羅的に検査することも可能になる。税理士も対抗上、同様のプログラムでチェックしつつ、決算を組むこともできる。

⑦上記のような税務監査プログラムの結果を、申告データに添付できれば、書面添付制度を「税務監査証明書制度」(税務調査免除制度)に、発展解消できる可能性がある。

5. データ標準化の未来

電子帳簿保存法には、標準フォーマットが指定されていません。その会社ごとに、まちまちデータ形式で保存してもよいことになっています。税務署では、納税者が使っているすべての種類のソフトを揃えておくことができないので、データを署内で見読することはできません。そのため調査官は、納税者の事業所に臨場し、納税者のコンピュータを借りて、データを見読しなければならないのです。納税者側では、税務時効が終了するまで、帳簿保存を行ったデータだけでなく、そ

現在、ISO (国際標準化機構) の場で、「ADC: Audit Data Collection 監査データ収集」という、監査データの標準仕様が検討されています。中国、アメリカ、日本などが中心になって議論が行われていますが、このデータ様式は、XBRLと同じ、機械可読な形式です。

仮に、このADCが国際標準として確立されれば、日本の電子帳簿保存法にも、標準フォーマットとして採用される可能性があります。そうなれば、これまで標準というものがなかった日本において、会計ソフトメーカー各社も、この標準に対応せざるをえなくなるでしょう。上記のようなメリットを享受できる日も、ぐっと近づくかもしれません。

また、国際租税回避を取り締まるべく、現在でも、各国の税務機関は情報交換を行っております。いまのところそれは、紙ベースかつ手作業が中心となっております。ここに電子データの標準規格が登場すれば、どうなるでしょう。国際的な税務調査の場面で、大量の電子データが自動的に突合され、網羅的に問題点が洗い出されるようになる可能性があります。

6. フィンテックの波を乗り切るために

さて、フィンテックやAIをはじめとする、めまぐるしいIT環境の変化の中で、われわれ税理士は、どのように進んでいったらよいのでしょうか。データの標準化は、この変化を、間違いなく加速させるはずですが。

その回答は、我々が日常おこなっている実務の中にあるだろうと思います。当たり前と感じている実務のジレンマを、当たり前として諦めず、「こんなこといいな、できたらいいな」と、ドラえもん的発想で、想像力豊かに未来図を描くことが、めまぐるしく変わるITの波を乗り越えていくために必要だと思います。

その時々トレンドや、新しいカタカナ用語に振り回されるのではなく、「あったらいい」と思う未来を、みずから思い描き、声を上げて行くことが必要です。未来を待つのではなく、ただ受け入れるのではなく、自ら思い描き、要求し、先駆ける。ITに対して、これまで以上に想像力と好奇心を働かせ、能動的に対処することが、必要になってくると思います。

の見読のためのシステムまで、保存しておく必要があります。そのうえ、せっかく電子で保存したデータも、調査官が、「紙の方が扱いやすいから、全部、紙に焼いて下さい」と言ったら、それに従わなければなりません。

もし、電子帳簿のための標準フォーマットがあれば、どうでしょう。標準形式で保存されたデータならば、調査官はそれをCDなどで受け取ることで、あらかじめ税務署で、データを見読することができます。調査の時間は、劇的に短縮するはずですが。これは納税者にとっても、税理士にとっても、また税務署にとっても、歓迎すべきことのはずです。

世界には、電子帳簿のための標準フォーマットを制定しようという動きがあります。

プロフィール

平成13年2月に税理士登録 (東海税理士会三島支部)、同18年5月から東海税理士会情報システム委員、同22年4月から一般財団法人XBRL Japanに入会、開発委員会XBRL GL SWGに所属、同24年5月~25年9月日本税理士会連合会情報システム委員会特命委員。代表作に、日本税理士会連合会編 水島みき作『税理士のための電子申告入門まんが イーダくんがゆく!』の原作脚本 (大蔵財務協会)、『XBRL GLで変わる? 未来の税理士事務所 12年後のイーダくん』(東京税理士会情報システム委員会)、東海税理士会情報システム委員会編『税理士のためのIT入門 正統』(編集参加)、アニメ「知らなかった!こんなに便利なXBRL GL」の脚本 (XBRL Japan制作) などがある。